幼児の心理と教育
〈2〉

幼児教育の現場の発展のために
――領域「社会」について――

田中敏隆

はじめに

前号では、領域「健康」に関する幼児の特徴と指導を中心に述べたが、今回は、領域「社会」に関する幼児の特徴と指導について述べてみることにする。

二、社会に関する幼児の特徴と指導

幼稚園教育要領の領域「社会」のところで望ましい幼児の経験や活動を組織するための事項が示されている。これらを大別すると生活の基本的な習慣や態度を育成することと、身近な社会の事象に興味や関心をもつようにさせることの二つである。前者には個人生活に関すること、社会生活に関するものが含まれている。幼稚園教育の「ねらい」を達成するためにそのアクセントを求めるとするならば、実はこの前者の事項にあるといえよう。本稿では、問題の焦点をここにおいて述べることにする。

それでは、なぜ幼児期は個人ならびに社会生活の基本的な習慣や態度を身につけておかねばならないのであろうか。それは、前号でも少し述べたように、この時期が、この特性を身につける最もレディネスにかなっているからである。もしこの時期に望ましい習慣や態度の基盤を育成することを逸すると、それ以後の時期ではなかなか身につきにくいのである。「三歳児からでは遅すぎ

る」という言葉の真意も、実はこの面の教育のことを強調しているようである。

(1)幼児の発達と生活の基本的な習慣や態度の形成

それでは、幼児期には生活の基本的な習慣や態度が身につき易い理由を、心理学の立場から説明してみよう。

情緒の発達の観点から

子どもの情緒の発達をみると、五歳児頃に一応成人にみられる情緒が分化してきている。この情緒が将来において、真（論理的情操）・善（道徳的情操）・美（美的情操）・聖（宗教的情操）へと発達して行くことを考えると、幼児期での情緒教育が非常に大切であることがわかる。このように、幼児期は情緒の急速な発達があらわれるのに、知的作用は、具体的・自己中心的である。そのために彼らの、環境への適応は、思考的、客観的に判断して行動するのではなくして、情緒的、主観的に判断して行動する。情緒は、環境からの刺激によって誘発されるものであるから、情緒を将来高尚な情操に発達させるために、望ましくない情緒は自己統御できるように指導するとともに、望ましい環境の設定を考慮することが必要である。

行動主義心理学と条件反射の観点から

「朱に染まれば赤くなる」という日本の諺があるが、このことは、年齢の若い層ほど真実性がある。行動主義心理学と条件反射では、刺激（環境）と反応（行動）との関係から人間の習慣や態度の形成は、環境の所産であると説くのである。パブロフの条件反射にみられるように唾液（反応）とベル（刺激）とはもとなんらの関係がなかったものが、結びつくようになってしまう。このことはつまり、よい環境を常に子どもに与えていると、望ましい習慣や態度が形成され、反対に悪い環境を常に子どもに与えていると、望ましくない習慣や行動が形成されてしまうことをいい表わしている。

精神分析の観点から

フロイトは、人間の意識を顕型と元型に区分している。顕型とは、日常生活においていつもみられる人間の意識行動であるが、元型とは、深層部に存在する意識である。一般的には、無意識と呼ばれている。顕型と元型とが著しく異なった人間は、二重人格者といわれる。顕型は、発達とともに模様がえできるが、元型は、五歳頃までの生活経験によって形成されてしまい、その以後なかなか変化しにくいと精神分析学では主張する。世間一般によくいわれている「あの人は育ちがよろしい」、「あの人はなりあがり」といった人柄は、およそ五歳頃までの生活環境と経験によって形成されたものであろう。

以上の三つの観点からして、幼児期は、望ましい生活の基本的な習慣や態度を形成するのに最も重要な時期であることがわかる。特に自主性、根気強さ、協調性、公共物を大切にする、社会性といった性格特性は、恐らくこの時期までに基盤が形成されてしまうらしい。これらの特性で後者の三つは、集団教育によって身につく面が強いのである。ここに、われわれは、幼稚園、保育所での教育に大きな価値を見出すことができる。

(2)英国の生活指導

英国では、幼児に対して基本的な生活習慣や態度を身につけさせるために、かなり厳格な教育が家庭でも保育学校でも行なわれている。家庭は、個人的な躾を中心にして行ない、保育学校は、集団的な躾を中心にして行なっている。家庭教育と集団教育の目標がかなり明白に区分されているようである。保育学校の先生に自分の子どもが自主性とか根気強さを身につけるようにお願いすることは、親の役目を知らないものと先生からお叱りを受けることになるであろう。先生は、目にとまる幼児の個人生活上のわるい習慣や態度を矯正さすべく指導しているが、多くの親は、その面の教育担当は自分の手でとの自覚をもっているようである。

英国の小学校一年生をみると、クラスによって入学期が異なっている。九月入学、その翌年の一月入学と四月入学のクラスがある。われわれ日本人の常識からすると、九月入学のクラスの年齢が一番高いと予想されるが、決してそうではなくして、それらのクラスの平均年齢は、ほぼ同じ程度である。なぜこのように同一年齢層にありながら入学期が異なるのであろうか。英国では、子どもが五歳児になっても、五歳児らしい社会的行動の発達がみられないと、親の方から九月入学を断念するようである。また入学前に学校側では、子どもの発達の水準を調べ、その一つである社会的行動の発達が遅れていると入学を拒否する。このようなことで入学期を異にするクラスができるのである。入学の発達調べは、知的、身体的、社会的の三つの側面から行なわれる。

このために、保育学校の教育は、遊戯教育を通じ社会的側面からの教育に中心をおきながら、知的、身体的側面からの教育を考慮して行なわれている。特に注目すべきことは、社会面の教育で、個人生活上の躾は、家庭が責任をもって行なっていることである。家庭教育で特筆すべき他の点は、多くの子どもは自分の部屋をもっていることである。かかる生活環境は、自立心とか自主性といった個人生活の望ましい態度を育成するのに大きな効果をあげていると考えられる。

(3)遊びが果たす望ましい習慣や態度の形成

幼児の遊びは幼児の生活において最も重要な位置を占めてい

る。心理学者、教育学者そして教育者も口をそろえて、遊びは、幼児の人格形成に重要な役割を果たすことを強調している。なぜならば、遊びに対して絶対的に興味と関心を持ち、自発的にその活動に参加し、その活動によって自己の身体運動的、知的、情緒的発達を促進させるとともに、社会的発達に多大の効果をもたらすからである。

それでは、一体幼児の遊びの型は一般的にどのような年齢的変化を示すものであるかをみよう。

二歳児の遊びは、平行遊び、独り遊び、あるは傍観者態度といった非社交的な遊びが圧倒的に多い。三歳児になると、これらの遊びは急速に減少し連合遊びと協同的遊びが芽生えてくるが、それも年上の子どもと一緒に遊ぶ状況でのことであって、未だに平行遊びが優位を占めている。この時期にスイスの心理学者ピアジェのいう集団的独語が遊び場面でみられる。また、集団遊びの意欲が強くあらわれ、遊び相手がないと想像上の仲間を作って遊んでいる姿がみられる。四歳児になると連合遊びが最も多くなり、次いで協同遊びとなる。五歳児になると協同遊びが最も優位になり、ここに遊びは一応グループ組織でなされるようになり、遊びの中で自己の役割を果たし、友だちと仲よく遊ぶ時間も長くなる。

幼児は、集団遊びによって自己のわがままが許されない行動であることを知るようになってくる。そして責任感、根気強さ、同情心、協調心、指導性、公正さと公共物を大切にするなどの個人ならびに社会生活における望ましい習慣や態度を身につけることになる。このような望ましい社会生活上の特性は、個人的遊びから集団的遊びへと急速に発達変化する幼児期に、その素地を身につけさせることが最も容易である。小学校に入学してから形成しようとしてもなかなか困難なことになる。ここに幼稚園や保育所において、一定の指導計画のもとになされる自由遊びが重要視される理由が存する。指導計画では、自由遊び、集団遊戯そして協同作業をみんなで、あるいは数人で力を合わせてやれることを数多く含める必要がある。特に五歳児にはこの点に力を入れて指導する必要がある。

(4)小学生についての事例研究からみた領域「社会」の重要性

ここでは、個人生活における望ましい態度である自主性と根気強さが、幼児期において基本的なものが形成されていないと、小学校に入学した後の学業成就に大きな影響をもつことを事例研究から述べてみる。

ここにあげる児童二人は、現在小学校六年生である。H・Tは知能偏差値五五であり、O・Kは知能偏差値五八である。このように両者の知能は、ほぼ同じ程度であるのにかかわらず、H・

Tは児童指導要録によると、学習の記録は一年生から逐次上昇傾向を示し、現在ではクラスの上位を占め学校生活に安定性を示している。行動と性格の記録によると、一年生から十三項目ともよい成績を示し、各学年の担任による特記は、一貫して自主性があり、根気強さがあると述べられている。これに対してO・Kの学習の記録は一年生から逐次に下降傾向を示し、現在では、クラスの下位に属し学校生活に不安定を示し、欠席もしばしばである。行動と性格の記録によると、一年生から十三項目とも成績がわるく、各学年の担任による特記は、一貫して自主性がなく、あきっぽくて、なまけぐせがあると述べられている。

両児童のかかる性格特性は、現在の担任教師も全く同意見である。このように知能がほぼ同じ程度であるにかかわらず、一人の児童は学校生活に安定性を示し、学業にすぐれた成就を示しているのに、他の一人の児童は不安定で、学業成就も大変よくない。この原因としては、事例研究からしていろいろ考えられるが、有力な原因の一つとして彼らの性格特性の相違をあげることができる。かかる性格特性の相違の基盤は、幼児期に形成されたものといえる。このようにみてくると、領域「社会」で取り扱われる幼児の生活上の望ましい習慣や態度の育成は、この二人の事例にみられるように、就学後の学業成就の程度を決定する場合もあり、それが、二人の学校生活の安定性に関係することに注目しなくてはならない。

以上領域「社会」での個人ならびに社会生活の望ましい習慣や態度に関して、幼児の発達上の特徴と指導、そして就学後の学業成就との関係性を概略的に述べてきた。これらのことからして、六領域を通じて幼児の全人教育が果たされるものの、領域「社会」は、その中でもアクセント的重要性をもっている理由が理解できる。最後にさらに指導上の事柄を若干つけ加えることにする。

指導は、経験方法によるのが最も効果的である。領域「社会」には、説得方法による面もあるが、一般的にいって効果が少ないのである。なぜならば、幼児は、自己中心性の世界に住んでいるために、よいこと悪いことの認識が客観的に理解できず、どうしてもその場の雰囲気に感情が支配され易いためである。幼児には身をもって実行させる経験的方法にまさるものはない。

また紙しばい・スライド・映画・テレビといった視聴覚教材とか童話などを使用するとか、指導者自身がえりを正しモデルになる行動をとることも必要である。

さらに子どもの善悪の行動をとらえたならば、その場で賞賛、しっ責、激励を与え、善悪の行動を身をもって認識させることが大切である。

（大阪学芸大学）